

## 関の彌太ッペ

山下耕作 東映 1963年

このテーマをもらって最初に浮かんだのは三本。アンリコ監督『冒険者たち』（1967年）と成瀬の『浮雲』（1955年）、それに『関の彌太ッペ』（1963年）だ。『冒険者たち』は我が最愛の映画であり、『浮雲』は十代の青年に人生を教えてくれた一本だった。だが、人生を変えたとなると山下耕作監督の名作『関の彌太ッペ』になるだろうか。

お小夜さん、この娑婆にやつれえこと、悲しいことがいっぱいあるでもな、忘れるこった。忘れて日が暮れりゃあ、明日になる

十二歳の時に憶えたこのセリフを、僕は半世紀以上にわたって口にしてきた。失意の底に沈んだ時、悲しみに暮れ生きる望みを失った時、どんな時でもこのセリフをつぶやけば、前を向くことができた。何度、この映画を見たことか。そのたびに錦之助と共に、僕は滂沱の涙を流す。

この映画のおかげで僕は、虐げられた人々、差別された人々、底辺で生きる人々（森崎東作品に出てくるような人たち）と同じ視点に立てた。以来、その視点だけは揺るがせないで生きてきた。それだけが、僕の唯一の誇りだ。

## 夏の嵐

ルキノ・ヴィスコンティ イタリア 1954年

戦後すぐ、戦前のフランス名画が次々に再公開された。中・高生の頃で、デュヴィヴィエ以外の諸作もペシミズム系が多く、一本には絞れない。その影響は高校3年生の夏に倒れ、心身の回復に6年を要した件と直結。人生に希望は持てず、異性とは悲劇に向かう。大学生活などないに等しく、その後の進路を見出した途端、岐路にぶつかり選択を誤った。

1950年代前半にブルックナーへ近づいた日本人はまれで、私には光だった。ある上京時、三番館で『夏の嵐』にやつと接し、第7交響曲の使用に堪能させられた。しかも時代や歴史への目。列島に満ちていた進歩的言説の薄っぺらさとは違うヴィスコンティの孤高と認識に開眼。回復後の教師生活や文筆を支える伏線となったか。悲劇の秀作だが。

ブルックナーが縁で築地市場のMさんを知る。2003年の三重フェスには2度も来津した。小津・成瀬の徒でもあり、私家版の大作「小津安二郎人と仕事」の初見は彼の自宅においてだったが、今や亡い。

ペシミズム、悲劇と切れていない自分に気づかされるアンケートだと酷暑に思う。